



聖光学院中学校・高等学校

“学校に縛りつけない教育”で、
ゼロから1を創り出す力を育てる



Kanagawa
•
Seiko Gakuin
Junior & Senior
High School

毎年、東大をはじめとする難関大学や医学部に多数の合格者を輩出し、進学校の印象が強い聖光学院中学校・高等学校。当然、受験対策はしっかり行われているが、それ以上に重視されているのが大学進学の見据えた教育だ。工藤誠一校長と2名の生徒に話を聞いた。

幅広い教養と自己肯定感を身につける

「育てたいのは、ゼロから1を創り出す力」と、工藤校長は力強く語る。

「グローバル化、情報化が進み、AI（人工知能）がさらに発達するであろうこれからの時代は、今すでにあることを発展させるだけでは対処できません。英語やICTといったツールを使いこなし、幅広い知識や経験に基づき柔軟に発想し、どんどんチャレンジしていくことが求められるのです」

聖光学院中学校・高等学校には、その素地を培う学びのチャンスがたくさんある。大学の教養課程で学ぶようなリベラルアーツを、中高6年間を通して学ぶのだ。幅広い分野に触れ、自分自身でさまざまな体験をすることは、「自己肯定感を高めるうえでも非常に重要」と工藤校長はいう。そして、この教養と自己肯定感こそが、突き抜けた学力と目標に向かって挑戦する力の源泉となるのだ。

そうしたリベラルアーツ型の取り組みの一つが、「聖光塾」である。教科の枠を超えたさまざまなテーマの講座が開講されており、生徒は自分の興味・関心のあるものに自由に参加する。自然体験、生物、天体、ロボット、手話、茶道、ダンス、海外研修・・・と、テーマは多岐にわたる。教員が設定したテーマだけでなく、生徒の要望を受けて取り入れたものもあるという。講師は同校の教員だけでなく、外部から招くことも多く、内容も大学レベルのアカデミックなもの。工藤校長は、「生きる力をつけるために



は、教科学習+αの自己啓発型の学習が不可欠」と断言する。

高3の早川侑哉君は、これまでいくつかの講座を受講してきた。なかでも強く印象に残っているのが、高校2年生の夏に受講した「古い書物に学ぶ」だ。これは、慶應義塾大学附属研究所道（しどう）文庫に足を運び、奈良時代から江戸時代にかけての書物を実際に見ながら、書物の役割や価値について考える講座。国語科の根本教諭が企画し、自身が大学院時代に教わった慶應義塾大学の佐々木孝浩教授に依頼して実現したものだ。もともと古文や歴史的な美術品、書物などに興味があり、独自に学びを深めている早川君にとっては、念願叶った受講だった。

「現物を目の前で見ることができ、とても感動しました。とくに感銘を受けたのが、藤原道長が書いた『法華経断簡』です。筆跡からは道長の息吹が感じられ、金泥の絶妙な色合いや紙の質感なども、目に



聖光塾で古い書物に実際に触れ、漢文研究への意欲をますます強めた早川君



マレーシア・シンガポール研修を機に、海外大学への進学に目を向け始めた禾君



マレーシア・シンガポール研修ではテイラーズ大学（マレーシア）を訪れ、英語での講義を受ける



4月末開催の聖光祭（学園祭）での模擬店出店に向けてクレープ作りにチャレンジ。同校では生徒のやりたいことを最大限にバックアップするため、予算に上限をの設定していないという

焼き付いています」（早川君）

「聖光は授業がおもしろく、もともと好きだった歴史に加えて、中学に入ってから古文にも目覚めた」という早川君は、同じ分野に興味を持っている仲間と話すのが、何よりの楽しみだという。今、彼が目指しているのは大学での漢文学研究だ。

社会に開かれた学校に

同校は2017年度より文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）に指定されている。SSHにより、グループで課題を設定して研究を行う「探究基礎」（中学3年生）、「探究」（高校1年生）の授業をはじめ、研究発表会、講演会、海外研修旅行など、生徒の主体的な学びの場がより大きく広がった。

高1の禾（のぎ）丈一郎君は、中学3年次の10月に、マレーシア・シンガポール研修旅行に参加した。最初に訪れたマレーシアでは、テイラーズ大学で英語講義を受け、グループで実験やディスカッションを行い、さらに自分たちの研究について英語で発表。禾君たちのグループは、水力発電について研究した内容を、パワーポイントを使ってプレゼンテーションした。「大学の先生や学生、卒業生、現地の起業家の方などが皆とても真剣に聞いてくださり、データや数値の信憑性などアカデミックな質問も飛んできました。自分たちが本気で取り組んだ研究が本気で受け止められたことがとてもうれしかったです」（禾君）



「管理教育で学校好みの生徒を作ってしまう」と語る工藤校長

さらに、シンガポールでは南洋工科大学でカプトムシの電子制御研究を行う佐藤裕崇准教授の講演を聴いた。禾君は、佐藤准教授の話をきっかけに、将来の展望が大きく開けたという。

「これまで、深く考えることなく、高校卒業後は日本の大学へ進学しようと思っていました。でも、佐藤先生が日本の大学と海外の大学の研究や教育を比較しながら実情をお話してくださり、海外の大学という選択肢もあることに気づき、海外への進学を本気で考えるようになりました」（禾君）

昨年8月に行われた全国のSSH指定校が集まるSSH生徒研究発表会では、同校の代表が最優秀賞を受賞した。工藤校長は、「発表する場があることで、目標ができる。そして、目標に向かって修練していくことで、生徒は大きく成長する」と、探究活動と発表とがセットになったSSHの取り組みを評価する。

ここに紹介したのはほんの一端だが、聖光学院ではいわゆる受験指導だけに囚われず、さまざまな教育を展開している。工藤校長は、それを“学校に縛りつけない教育”と呼ぶ。

「学校だけでできることは限られています。社会とつながった開かれた学校となり、生徒の個性、多様性をより伸ばし、一人ひとりの自己実現をサポートすることが我々の責任。管理教育で学校好みの生徒を作っても意味がありません。大切なのは、生徒を認め、信じること。真の創造は、混沌から生まれるのです」そう話す工藤校長の言葉からは、教育者としての確かな信念と教育に掛ける熱い思いがひとと伝わってきた。